

---

# U S O よね . . .

Seabolt

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

USOよね……

### 【コード】

N2818Z

### 【作者名】

Seabolt

### 【あらすじ】

突然、お見合いをしるといわれたのぞみ……そのお見合いも既に結婚が前提……。しかも、相手は……。

「は……」

溜息をしかでなかった。なぜ私が？……しかも……この年で……まだ高校生なのに……そう自問自答する彼女の名は岡田のぞみ、彼女にとって今回のことは寝耳に水、天国から地獄とはこのことだった。ただベットのうえでただ呆然とし、何度もため息については、ついさっきのことを思い出していた。

「えっ……!!お見合い!?!……どういうこと?」

家に帰ったのぞみはは思わず大声を上げてしまった。のぞみにとって……この日、天国と地獄がいつぺんにやって来た。それは2学期が始まってすぐのことだった。

まず最初にやってきたのは天国だった。実はこの日のぞみは中学からの同級生の島田雄二から学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすつとした顔立ちをした島田雄二が待っていた。

彼は甲子園へは行けなかったが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあった。

「島田君、どうしたの？こんなところに呼んで。」

そう話しているのぞみ自体、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だった。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田！！！おれ・・・ずっとお前のことが好きだった。そして、今も・・・」

目の前で起こっている夢にまで見ていた光景にうつとりとしているのぞみだった。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけではなく、答えはむしろYESと即答したいところだったがここはぐっと我慢した。しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らった感じになった。それは、のぞみが近づいて手をとろうとした時だった。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！！」

「えっ？」

「明日、ここぞいな！！」

のぞみが驚いている間に島田は、さっさとこのぞみから離れ去って行った。なんなのよ！！と思いつつも気分は最高の状態だった。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かった。それは、家に帰ったのぞみを父が呼び止めたことから始まった。今思えば、大體ごく普通のサラリーマンである父は、こんな時間に家にいること自体珍しいと言うかおかしいことであった。

「のぞみ・・・ちよつといいか？」

珍しいなあゝのぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・・これってどういうこと？ひよつとして、私に就職しろということ？これでもれつきとした受験生ののぞみ・・・しかも・・・私立だけど進学校である城山高校の・・・それともリストラにあつて学費がきつくなつたの？そう思っているとお父さんが話しかけてきた。

「まあ・・・座りなさい・・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・二人の雰囲気・・・やはりおかしい・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん？そう思っていたのぞみの予想だになかった言葉が父の口から飛び出してきた。

「のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えっく！！お見合い！？・・・どういうこと？」

私は思わず大声を上げてしまった。

「だから、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母はにこやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ　　えっ？い・  
・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ど・どどどど  
うこと？そ・・・そうよ・・・これはきつと冗談よ・・・そう・・・絶対  
そうよ・・・

「ジヨ！！・・・冗談でしょ？お父さんたら〜ねえ〜またまた・  
そうでしょ？」

父の表情が少しやわらぎ、いつものおちゃらけた雰囲気を出してき  
た・・・やっぱりそうでしょう。おとうさん・・・

「そう・・・冗談・・・」

少しふざけたように言おうとした時を母が制した。

「あなた！！」

えっ？お母さんまで・・・どういうことよ。再び父の表情が険しく  
なった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、  
お母さんまで、お互いの顔を見合せて頷いちゃって、しかも・・・  
真顔でのぞみのほうを向いた。

「本当だ・・・」

嘘——！！のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言ってるのよ〜おとうさん・・・うそでしょう？しかし、本当だという言葉が何度も繰り返し返り頭の中を駆け巡る・・・どういうこと？のぞみはしばらく呆然とした。

「う・・・そ・・・よ・・・ね」

「うそじゃないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うそでしょ・・・わたし・・・受験生よ」

「のぞみ〜頼むから・・・」

そう言った父の方をみると土下座してるのに見て驚いた。・・・ちよつと何してんのよ・・・そう思っていると母まで土下座をしはじめた

「やめてよ〜おとうさん・・・お母さん・・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめない二人、

そもそも原因は、のぞみの父にあった。彼の学生時代　父が通っていた大学の親友である藤堂さんとある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだった。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。し

かし、ある日のこと、仕事上で藤堂と会うことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えているだろうな。」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに・・・と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは噛み付いた。

「ちょっと待つて!!この話って・・・すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ!!」

「いやよ!!、なぜ!!いきなり結婚なの!??」

「本当にすまない。」

とうとう父は土下座をしたまま、頭を床に当て、私のほうへ顔をあげることにすらしなくなった。ん?と母を見るとにこやかな顔をしてのぞみを見ている。

「いいじゃない・・・のぞみ・・・行き先決まって。」

「ちょっとお母さん!!..な・・・なんてこと!!..」

「彼氏いるの?」

「な・・・母さん!!..!!」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ・・・」

「ちょ．．．ちょっと．．．」

「丁度よかったじゃない．．．」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ．．．たのむ．．．」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなった頭を床に擦り付けている姿が哀れでしろうがなくなってきた。おとうさんも乗り気じゃないのに．．．ここまでするなんて．．．のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかったわ．．．」

そして、ガクツと肩をおとし、うつむき床の継ぎ目を私はじっと見ている。

そんな．．．酒の席のことを．．．

はあ．．．なんて不幸な少女なの私は．．．そう思っていると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ．．．これ．．．」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した目の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくっとする父

しばらく黙っている……

「これは？」

もう一度聞くと父は目を閉じふうとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語った。  
しかしその声は徐々に声が小さくなる父親……そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ……相手の名前は、藤堂光……」

藤堂光その名前はのぞみにとって、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった……しかし、その写真を見て愕然とした……おかつぱ頭のデブ……センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして……それになに、この意味のない無精ひげ……一瞬期待していたのぞみにとつては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとうつぶむいて目をあわそうとせず小さな声でぼそつと

「28さい」

のぞみは目を見張って、もう一度の写真を見た。2……28歳って私より10歳も年上ってどう見てもこの人28に見えない……しばらく、その写真をじつと見ていたというか固まっていたのぞみ……やがて……手が震えだした。

「のぞみ??」

かすかに聞こえる母の声、どうしよう振るえが止まらない・・・

「うそ・・・よ・・・ね？」

私はお見合い写真がぼとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るとさっと頭を下げ土下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・・・

・・・

・・・

かなりの沈黙の後、

「あゝ！！！！！！！！！」

のぞみの心からの叫び声に驚き両親は、思わず抱き合っていた。

どうしよう・・・

本当に娘の幸せを考えてるの？

はあ〜……とため息をついて席を立った。

「どこに行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合っただままびくっとなっていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！！そう思っているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんだ。

藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車でご登校。そんな彼らのぞみも憧れていた一人だった……。でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えりがいる。しかもその彼女とは幼馴染ときている。どこにも入る隙もないし、うわさではちょっとしたいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとっては雲の上の存在の彼だった。いくら同じ名前でも……と思えば再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベットの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにごく平凡な顔立ち空手を  
しているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいしなんて不幸なん  
だろう……。やっぱりあのおかっぱデブとは、違いすぎる……。  
いかなんとかしないと……。うーん……。何か忘れているような。  
……。そうだ……。今日告白されたんだってっけ……。今度は  
島田雄二の顔が浮かんだ……。明日返事しないと……。ん？……。こ  
の見合い壊すの手伝ってくれるかな？。あくどうしよう……。眠れ  
ない……。

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

藤堂は、さつき父親から渡されたもう一度お見合いの写真をみた・  
・そして、思わずゴミ箱に投げ捨てベツトに倒れこんだ。親父の奴  
全く一体何を考えてるんだ?・・これが藤堂が最初に思ったこと  
だった・・

実は同じことが藤堂家でも起こっていた。

それはちょっと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤  
堂は父の言葉に我が耳を疑った。

「来週の日曜日に婚約者と会うことになった。」

「ちょっと待て!!婚約者って!!どういうことだ!!」

ダーン!!!と机を思いつきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・いきなり結婚という訳にいかんから、  
とりあえずお見合い形式で顔をあわせることにな」

「約束って、俺何も聞いてないぞ!!」

「やかましい!!」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光!!もう決まったことだ!!それとも、わしの顔を潰す気か!  
」

立ち尽くしぐつと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいたいこうなると親父は誰の言うことも聞かなくなるということ息子である藤堂自身が一番知っていた。

「けど・・・」

藤堂の言葉を見無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良い噂きかんのだが」

「なんのことだ。」

「この前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車でぶつかってきた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は10日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出さずなどまで言っていたのだ。しかし、藤堂に逆らったら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま噂に負けて学校を去った。あのことをうらんでいるのか親父は？そう思う藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違つたろうが！！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合い写真  
を藤堂の前に出した。

「？」

目の前に置かれた見合い写真を見て、いやな予感がした藤堂……  
手にした見合い写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のぞみさん28歳」

その言葉にちよつと待て今なんていった？確か28歳って言ったよ  
な？そう思つて父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだったろ？」

ぐつと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身  
の回りの世話をしてくれた家政婦だった。しかし、そんなことは藤  
堂にとつて既に過去のことだった。何をいまさら 写真を開  
いて見た。その瞬間、目はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬  
直した。そして、わが目を疑つた。

「……………（声が出ない）」

な……なんだ？この写真？親父本気か？どう見ても40過ぎのおば  
ちゃんじゃねえか？しかも、下手なというか？なんていう化粧の仕  
方だ？そう思つたらただ震えて……父親を睨んだ。

「なんだその目は……」



この日、のぞみは最悪の目覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになった瞬間にけたたましく鳴り響く目覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさ。それは2度寝をして起きた後に訪れるとてつもない眠りと体のだるさの非ではないくらいつらいものとなった。何とか起き上がったのぞみだったが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだった。ただ今日島田に会うこと、それがのぞみの唯一の希望の光であった。ただ彼女の悲劇はこれだけでなかった。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていなかった。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫っていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然とあるいていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかった。そうその車の主は藤堂だった。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで目を覚ました。

「どっした？」

運転手がクラクションを鳴らすが目の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあった。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワザとか？」

目の前をふらふら歩く少女を見た藤堂　なんなんだこいつ？  
どういうつもりだ？　そう思いつつも目の前の様子を見ると、  
クラクシヨンに一向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは  
埒が明かないそう思った藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えっ？でも」

「いいから止める」

車から降りた藤堂はのぞみに向かって歩いて行き腕をとった。

「おい」

腕を取られたのぞみはえっ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に  
突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になっていた。もう・・・  
なんなのよ！！そう思っているところへ再び藤堂が声をかけた。

「おい！！」

「なんなのよ！！一体！！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があった。しまつ  
た〜何故藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まってしま  
った。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、  
しかもその真つ赤でかすかに涙を浮かべている目が自分をしたから見  
つめる姿に言葉を失った。

「あっ……」

しばらく見つめう二人……その様子を見ていたギャラリィからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見る。」

のぞみが指差されて方を見るとそこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。やばーやっちゃった　震える指で車をさしたのぞみは、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして……」

「そう……」

少し険しい顔をした藤堂がコクリとうなずいた。

「私が邪魔を……」

「そう……校門から……」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「ごめんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まずい……怒鳴りつけられる……どうしよう

そう思いのぞ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになって怒鳴り散らしていたからだった。しかし、このときは何か違った。車が通れるとこを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「ごめんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのぞみ

「わかったから、行け。」

「ありがとうございます。」

助かった……そう思いのぞみはそそくさと逃げて行った。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さっきまで握っていた手をみた。なぜ？俺は怒らなかつたんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を目で追った。そんな時だった。ふと小さい頃を思い出した。ひかるちゃん偉いね！そう言って藤

堂の額にキスをする少女も姿……あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだった。気が付くと自分の額に手を当てていた。

いかん……俺は何を……やはり昨日のことで眠れなかつたせいかな……藤堂は頭を振った。そして、運転手に

「ここから歩くから……」

そっぴい残し、教室に向かった。

さいあく・・・2

あゝ！！さいあく！！！！朝からなんてついてないの　のぞみは頭を抱え自分の席にいた。やってしまった・・・手を引かれ一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限つてのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかった。ひよつとして・・・学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだゝ！！・・・その瞬間、さっきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したくもない顔に変化した、そうおかつぱ頭をした意味のない無精ひげを生やしたデブのおっさんの顔が・・・思わず頭を左右に振り、そして、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそつと近づくと二人の姿があつた。親友の岩崎裕子と大山美由紀だつた。

「のぞみ〜見たわよ〜」

「うるさい・・・」

のぞみは、ふと顔を上げ・・・はあ〜とため息をつきつつむいた。その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元氣ないね。」

「いや。別に・・・」

目の前に立つ二人を見たのぞみ・・・彼女らのにこやかな笑顔を今日は、なぜか、気分が優れない。再びため息を付いたのぞみ。それを見ていた大山はそつと後ろに回つた。

「本当？」

そう言って、のぞみの首を絞めた。

「ぐあゝ!!!!」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞった、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね」

「は・・・はなして・・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふうとため息を付いて二人を見た。

「あんなことって？」

のぞみの言葉に目が点になる二人・・・

「ちよつと!!!!大丈夫、のぞみ!!!!」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持って前後に激しくゆすった。その揺れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持ってゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよ!!!!」

「だから、今朝のことよ・・・」

「今朝って？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・・あれね・・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるって、もう学校中大騒ぎよ！  
」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさっきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あゝ！！と叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する二人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょう！！！！ね」

そう言って大山がのぞみを手を引いた時、

「ほつといてよ、それどころじゃないのよ。あゝ！！もう終わりよ！！！」

そう言つてのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入って思わずのぞみから離れた。

机に伏せているのぞみは、フト暗くなつたのに気付いた。どうしたんだろう、ひよっとして眠ってしまったの？そう思つて見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立っていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・音羽と

その愉快的な仲間達だ・・・ただそう思っていた。ふと見ると岩崎と大山の姿がなかった。どこ行ったのとあたりをキョロキョロしていると教室の片隅に二人が逃げていたを見つけた。あの二人・・・そう思っていたら、目の前で腕を組んで立っている音羽がのぞみを睨み声をかけてきた。

「ちょっと!!あなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひょっとして?」

「あなた以外に誰がいるの?」

えっ?何で私なの?そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告って?」

どういうこと?のぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そう・・・あなた・・・自覚なさそうね」

「なにを?」

「本当に・・・しらばっくれて!!」

「えっ？」

「藤堂さんの車の前を邪魔したでしょう！……！」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座ったまま少しのけぞった。その時、のぞみを再び睡魔が襲ってきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うあああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふっと吐いた・

「まあ、今日は見逃したげるわ・ふん」

そう言い残して音羽たちは教室を去って行った。

しばらくして、近寄ってきた岩崎と大山……

「なに……あれ……」

「なに……って、あんた達、」

のぞみ急にキョロリ、キョロリと二人を見て

「えっ……どうしたの？急に元気出して……」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょうっ？お仕置きよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2818z/>

---

USOよね・・・

2011年12月14日20時52分発行